

伊豆沼のカメラマン 迷惑行為

公益財団法人 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団 上席主任研究員
嶋田哲郎 文・写真

写真2 ずらりと並ぶカメラマン

マガンの飛び立ち

伊豆沼・内沼を代表する鳥であるマガンは9月下旬から2月上旬にかけて越冬します。伊豆沼・内沼を含めた周辺地域は日本に飛来するマガンの9割以上が集まる、国内最大の越冬地です。マガンの一日をみると、夜間、沼でねぐらをとり、日の出とともに水田へ移動し、日中、水田で活動した後に日没とともに沼へ帰ってきます。マガンの朝の飛び立ちは伊豆沼のハイライトのひとつです（写真1）。日の出とともにゴーッとという羽音が響き、投網が広がるように群れが迫り、あっという間にガンの群れに包み込まれます。そして周囲に満ちるキャハンキャハンという声。まさに圧巻です。このマガンの飛び立ちは多くの人を魅了します。

いろいろなカメラマン

伊豆沼にはいくつかのマガンの飛び立ち観察ポイントがあります。中でも一番有名なのが、獅子ヶ鼻と呼ばれる伊豆沼西岸を南北に



写真1 マガンの朝の飛び立ち

走る堤防です。太陽が水面を照らし、太陽を背景にガンが飛ぶという光景はここでしか見られないのです。東日本大震災前、この堤防は車1台しか通れない狭い道でした。カメラマンは堤防下の農道に車を止め、歩いて堤防に移動していました。震災によって堤防が地盤沈下したため、その後、堤防のかさ上げ工事が行われました。そのときに行政の配慮によって、車2台分程度に拡幅されました。

この堤防は地元の農家の人も利用するため、その利便を考えてのことでした。

車2台分の幅があれば、脇に止めても車の通行に支障がなくなります。そのため堤防に車を乗り入れるカメラマンが激増しました。堤防に到着した後も、車幅灯をつけたままの車、ラジオの聞こえてくる車、暖をとるためかエンジンをつけたままの車など、静かに止まっていない車があります。そして日の出前、多くのカメラマンがずらりと堤防に並びます（写真2）。混雑している状態でも車で無理やり入ってくるカメラマンもいます。フラッシュをたいて撮影するカメラマンもいます。多いときには120人を越える観察者が訪れ、40～50台の車が駐車されます。地元のカメラマンから聞いた話では、カメラマン同士で場所とり問題でトラブルもあったようです。そして地元の農家の人は申し訳なさそうにカメラマンの間を通っていきます。中には、業を煮やして少し乱暴に運転する人もいます。その気持ちもわかります。マガンの飛び立ちは日の出後30分ほどで終わります。そして人が帰ったあとは何事もなかったかのような静かな場所に戻ります。こうした喧騒は日の出前後1時間だけのことです。

朝の飛び立ち以外でも問題があります。日中、水田で休息しているマガンに不用意に近づいて飛ばしてしまう、あるいはわざと飛ばして写真を撮る、といったカメラマンもいます。もし自分が寝ているところを突然起こされたらどう思うのでしょうか。また、我が物顔に農道に車を止め、農家の人の通行の妨げになったり、注意した農家の人に逆に食ってかかったりするカメラマンもいて、さまざまな苦情が私たちのところに届きます。水田は基本的に私有地です。許可なく田面に入ったら農家の人に怒られて当然なのです。

堤防の木がいっぱいで見通しが悪くて撮影しにくいから木を切ってくれないかなあ、と言われたこともあります。人にとって都合のいいことは、あなたの好きな鳥にとって不都合なことですよ、と言いましたが、わかってくれたようには思いませんでした。なにより疑問に思うのは、カメラマン自身の問題をカメラマン同士で解決せずに、こちらに持ち込んでくることです。同じ趣味を持っている者同士、自分たちで話し合っただけで自己ルールを作ればいいのでは、と思います。

伊豆沼に来るカメラマンがすべてそういう人なのかと思うかもしれませんが、もちろんそうではありません。自然をよく理解して、ルールをきちんと守るカメラマンの方がずっと多いのです。一部のカメラマンの行為が事態を悪化させているのです。

変化したマガンの行動

人の影響によってマガンの行動も変化しました。堤防に近かったマガンのねぐらが次第に堤防から遠くの場所になったのです。その要因のひとつは車が堤防に曲がるときに湖面を照らすライトの光です。かさ上げ工事にもなって目隠しとなっていた樹木がなくなったことも照らされやすくなった一因です。マガンはねぐらをとるときに浅瀬を好みますので、堤防際に寄っていることが多いのですが、このライトによって驚き、堤防から遠い水面へ移動しました。もうひとつの要因は人の数です。堤防にずらりと人が並んでいる光景は、マガンにとって脅威以外の何物でもありません。安心を求めてマガンは堤防から遠くの水面へ移動したのでしょうか。

また、これまでは飛び立つとすぐに堤防へ向かってきたのですが、人の壁を避けるよう

に一度旋回し、堤防を避けて移動する行動も時々見られました。マガンの飛び立ちをみると、堤防上にいる人の上を飛ぶときにはその場所を避けるように群れが2つに分かれます。獅子ヶ鼻では、狭い範囲を多くの群れが移動するため、やむなく人の上を移動していたと考えられます。しかし、あまりに人が多くなったため、我慢の限界を超え、堤防を避けるような飛翔パターンになったのだと思います。

いつまでもこの光景をみるために

堤防が拡幅されれば、これまでの様子からこうした事態は予測できることです。この光景を多くの方に気持ちよく見てもらうにはどうすればいいか、私たちも関係する自治体にさまざまな対策を働きかけてきました。農地を借り上げて駐車場を整備する、堤防下の農道を整備するなど、さまざまな案があります。行政も努力してくれていますが、それぞれに難しい問題があり、現時点ではカメラマンのマナー遵守を促す看板の設置となっています（写真3）。

ひとつの光明は地元のカメラマンが動き始めたことです。伊豆沼にはほぼ毎日通ってくる熱心なカメラマンが数人います。彼らは伊



写真3 注意看板と問題となっている堤防

豆沼クラブを結成して、この場所の適切な保全対策を市へ要望するための署名活動を始めました。カメラマン自身が写真を撮るだけでなく、被写体のことを想い、それらの持続的な利用に向けて自ら動いたことはたいへんすばらしいことだと思います。

問題が起きると、とかくカメラマンのマナーが悪い、行政の対応が遅い、などだれかに責任を転嫁する議論がよく起きます。しかし、だれかに責任を押しつけても問題は解決しません。責任を押しつけあって敵対するよりもむしろ力を結集する必要があります。なぜなら、社会全体からみた自然保護の声はまだまだ小さいからです。マガンの飛び立ちをみる人の中にはカメラマンのほかに、バードウォッチャー、研究者、ちょっと変わったところでは俳句を詠む方などもあります。立場は違えど、みな自然愛好者で、自然を残したいと思っている人たちです。しかし、社会全体からみれば、ごく少数派です。幸いにも伊豆沼・内沼はラムサール条約登録湿地でもあり、長い保全の歴史があるため、社会もその重要性を認識してくれています。しかし、そうでない場所では、社会の風向きによって自然が損なわれることもあるでしょう。お互いに問題を認識し、解決し合いながら、カメラマンも含めた自然愛好者みんなで力を結集して、自然が少しでも損なわれないように、そしてすばらしい自然を次世代に残すことを考え、行動をしていく必要があります。

執筆者プロフィール

嶋田哲郎（しまだ・てつお）。1969年東京生まれ。公益財団法人 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団上席主任研究員。博士（農学）。ガンカモ類など水鳥類の研究のほか、伊豆沼・内沼の自然再生、外来種防除に取り組んでいる。著書に『ハクチョウ 水べに生きる』（小峰書店）など。